

# 宇治十帖における大君・中の君姉妹の〈眠り〉

——姉妹の「もろとも」空間を視座として——

前田 絵美

はじめに

源氏物語において「まどろみ」や「昼寝」といった〈眠り〉は、登場人物が夢を見ている状況だけに限らず、物語の中で多様に描かれている。そして、時には浅い〈眠り〉さえもできない人物の姿が深い心情描写と共に描かれている。

源氏物語における〈眠り〉に関する用例を見ていくと、純粹に眠るといふ用例よりも、何か心に氣に掛かることがあつて寝られないという人々の姿の方が印象的に描かれているといえる。源氏物語の一卷目、桐壺巻で〈眠り〉に関する語が初出するのも、桐壺帝が寝られないという場面である。

御胸のみつとふたがりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行きかふほどもなきに、なほいぶせきを限りなくのたまはせつるを、「夜半うち過ぐるほどになむ、絶えはてたまひぬる」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて帰り参りぬ。聞こしめす御心まどひ、何ごとも思しめしわかれず、籠りおはします。  
(桐壺・①・二三)

病をわずらつた桐壺更衣は、更衣の母君の強い願いもあつて桐壺帝から里へと退いた。更衣が退出した夜、更衣の容態が氣掛かりで、

桐壺帝は胸がいつぱいになって眠れず、夜を明かしかねている。更衣が亡くなつた後にも、「まだ大殿籠らせたまはざりけると、あはれに見たてまつる」(桐壺・①・三三)と、桐壺帝が寝られない夜を過ごしている姿が軋負命婦によつて捉えられる他、更衣を失つたことによる桐壺帝の哀傷が、物思いに暮れて夜を明かしかねている姿と共に描かれている。

灯火を挑げ尽くして起きおはします。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬるなるべし。人目を思して夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。朝に起きさせたまふとても、明くるも知らずと思し出づるにも、なほ朝政は急らせたまひぬべかめり。  
(桐壺・①・三六)

更衣が存命中であつた頃は夜が明けるのも知らないで眠つていたことを思い出すにつけても、独り寝の寂しさに桐壺帝は眠ることができず、更に深い物思いへと陥つていくのである。桐壺帝のように、愛する人を亡くした悲しみにより眠ることができないという人物は、他にも、葵の上を失つた際の源氏、大君を失つた際の薫などが挙げられる。

また、男女間の問題によつて寝られない夜を過ごす人物の姿も描かれている。

女は、いとものをあまりなるまで思ししめたる御心ぎまにて、齡のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜離れの寢覚め寢覚め、思ししをるることいとさまさまなり。

(夕顔・①・一四七)

夜離れがちな源氏に対して思いを募らせる六条御息所は、悶々とした夜を過ごし「寢覚め」がちになっていく。

このように、〈眠り〉は、感情のパロメーターとしての役割をも担っているように思われる。満ち足りた〈眠り〉と、それとは逆に寝られない「寢覚め」がちな夜を過ごす人物の姿の描写に、〈眠り〉の背後にある深層世界を投影しているのである。

これまで、源氏物語の〈眠り〉は、夢との関わりで述べられることが多く、純粹に〈眠り〉に焦点が当てられることは少なかつたように思われる。本論では、行動を共にする場面が多く語られる大君・中の君姉妹を〈眠り〉を軸として考察していきたい。

## 一 「もろとも」空間の結び

大君と中の君姉妹の父親である八の宮は、自分の死期が迫ったことを悟ると、姉妹に、くれぐれも軽はずみな考えからつまらぬ結婚はするな、などと戒めて、宇治の山寺に籠り、姫君たちの悲しみをよそにそのままこの世を去ってしまった。残された大君と中の君は、父親不在の不安を抱えながらも、姉妹としての連帯感を強めていく。

**二ところ**、いとど心細くもの思ひつづけられて、起き臥しう

ち語らひつつ、「一人一人なからましかば、いかで明かし暮らさまし。今、行く末も定めなき世にて、もし別るるやうもあらば」

など、泣きみ笑ひみ、戯れ事もまめ事も、**同じ心**に慰めかはして過ぐしたまふ。  
(権本⑤・一八七)

二人の姫君は、心細く、物思いに沈みながらも、二人で一緒に起き臥しには語り合い、泣いたり笑ったり、遊ぶにも仕事をするにも行動を共にしていく。このような姉妹の姿は、この後、「もろとも」「二ところ」「同じ心」などと表現されていく他、女房たちからは、「御心地ども」「御身ども」「御ありさまども」など、二人を一括りにした発言が多く出てくる。

ところが、父親の訓戒を守り、二人で支え合い、慰め合ってきた姉妹の連帯感を揺るがす人物が現われる。薫の存在である。橋姫巻において、琴を合奏する姿を垣間見されたことがきっかけとなり、大君に思いをよせていた薫は、一度は大君に胸中を訴えていたことがあつたものの、八の宮の一周忌の準備の為に宇治を訪れ、その夜、大君に再び意中を伝える。しかし、懸命に拒む喪服姿の大君を前にして、思いを逃げずに引き下がったのであつた。明け方に薫と別れた大君は、女房たちが自分たちのことをどのように思っていたかと思ひが悪く、「とみにもうち臥」すことができない。忍び泣きながら朝を迎えた大君が、現実逃避するかのように入ってしまったのは、中の君が寝ている部屋であつた。

音泣きがちに明かしたまへるに、なごりいとなやましければ、**中の宮の臥したまへる奥の方に添い臥したまふ**。例ならず人

のささめきしけしきもあやしとこの宮は思しつづ寝たまへるに、かくておはしたればうれしくて、御衣ひき着せてまつりたまふに、ところせき御移り香の紛るべくもあらずくゆりかをる心地すれば、宿直人がもてあつかひけむ思ひあはせられて、まこ

となるべしといとほしくて、寝ぬるやうにてもものたまはず。

(総角・⑤・二四二)

中の君は、女房たちが「かうなりけりとけしきとりて」ひそひそとささやき合っているのに気づき、不審に感じながら横になつていたが、姉が入つて隣に横になつたので「うれし」と感じる。しかし、姉に衣を掛けてあげるといふ妹のいたわりの仕草は、大君に移つていた薫の香りをふわりと舞い上がらせた。薫の香りはかつて、「なほ、忍びてと用意したまへるに、隠れなき御匂いぞ、風に従ひて、主知らぬ香とおどろく寢覚めの家々ありける」(橋姫・⑤・一三六)と描かれていたように、隠そうにも隠しきれず、辺りに漂つていく。

これまでの二人の間にはなかつた香りを身にまといつて居る姉を見て、中の君は女房たちが取沙汰していたことは本当のことだつただと敏感に感じ取つたのであつた。そんな姉を「いとほし」と思う中の君は、寝たふりをして、大君に声を掛けようともしない。姉に對するいたわりの中に、いつもと違ふ姉にどのようにつれたいのかわからない中の君の戸惑いを感じ取ることができよう。その一方で、中の君の隣に横になる大君の心の中には、自分の代わりに中の君を薫にという思惑が秘められていたのであつた。

大君と中の君の「もろとも」空間の中に介入した薫の香りは、二人の間に共通性のない異質な存在として分け入り、心に亀裂を生じさせ始めているのである。

この場面とは逆に、大君が寝ている中の君に衣を掛ける仕草が描かれる場面がある。八の宮の喪が明けて、薫がいよいよ大君の寝所に忍び込もうとした夜のことであつた。

中の宮も、あいなくいとほしき御氣色かなと見たてまつりたま

ひて、もろともに例のやうに大殿籠りぬ、ことさらめきてさし籠り、隠ろへたまふべき物の隈だになき御住まひなれば、なよやかにをかきし御衣、上にひき着せてまつりたまひて、まだけはひ暑きほどなれば、すこしまろび退きて臥したまへり。

(総角・⑤・二五〇)

いつも通りに見える姉妹の(眠り)の裏には、薫が手引きされてこの部屋に入つてくるかもしれないという大君の不安が充満しているのである。しかし、大君が中の君に掛けた柔らかなで美しい着物や、中の君から少し離れて横になるという行動からは、大君が薫と中の君を結婚させようと目論んでいるしたたかさを垣間見ることができ。また、大君のそんな思惑を知るはずもない弁は、姉妹が「同じ所に大殿籠れるをうしろめたし」と感じ、気掛かりに思いながらも、薫を大君の寝所へと案内していつたのであつた。

うちもまどろみたまはねば、ふと聞きつけたまひてやをら起き出でたまひぬ。いととく這ひ隠れたまひぬ。何心もなく寝入りたまへるを、いといとほしく、いかにするわざやと胸つぶれて、もろともに隠れなばやと思へど、さもえたち返らで、わななくわななく見たまへば、灯のほのかなるに、袿姿にて、いと馴れ顔に几帳の帷子を引き上げて入りぬるを、いみじくいとほしく、いかにおぼえたまはむと思ひながら、あやしき壁の面に屏風を立てたる背後のむつかしげなるにゐたまひぬ。

(総角・⑤・二五一―二五二)

薫が手引きされて部屋に入つてくることを予想していた大君は、緊張して寝られず、そつと寝所に忍び込んでくる薫の微かな気配を感じ取り、素早い動きで身を隠してしまふ。そして、残された中の

君を「いみじくいとほしく、いかにおぼえたまはむ」と遠巻きに見ながら感じていたのである。

薫が関わる姉妹の（眠り）の場面においては、中の君が横になっている人物として描かれるのに対し、大君は外から帰ってきたり、今回の場面では寝ている中の君を置いて逃げてしまったりと、姉妹の「もろとも」空間を移動する人物として描かれている点が特徴的であるといえよう。大君が移動することにより、薫の香り、そして薫本人が「もろとも」空間へと介入していく。その介入の仕方は直接的ではなく、大君というワンクッションを経たもので、滑らかなものである。

大君が中の君の気持ちを押し量り、心配する様子が語られるのは、大君が身を隠してからのことである。薫と中の君を結婚させるべく取った下準備と素早い行動に反して語られるのは、裏切ってしまった妹への後悔という純粹な気持ちである。「もろともに隠れなばや」と思いながらもそれを躊躇し実行しなかった、大君の「もろとも」放棄は、姉妹の關係に暗い影を落としていくのである。

## 二 中の君の昼寝の夢

次に見ていきたいのは、中の君が昼寝の夢に、亡き八の宮の姿を見る場面である。源氏物語において「昼寝」の用例は五例<sup>⑤</sup>見られ、そのうちの三例は夢との関わりで描かれている。源氏物語における「昼寝」については、父親のまなざしとの關係を原岡文字氏が指摘している。原岡氏は常夏巻における雲居雁の昼寝場面から、雲居雁から放たれる「無心の身体のエネルギー」を指摘し、それに圧倒さ

れ管理しかねる父親のまなざしの行方を論じている。雲居雁、うたた寝を父親にたしなめられる。

姫君は昼寝したまへるほどなり。羅の単衣を着たまひて臥したまへるさま、暑かはしくは見えず、いとらうたげにささやかなり。透きたまへる肌つきなど、いとうつくしげなる手つきして、扇を持たまへりけるながら、腕を枕にて、うちやられたる御髪のほど、いと長くこちたくはあらねど、いとをかしき末つきなり。人々物の背後に寄り臥しつうち休みたれば、ふともおどろいたまはず。扇を鳴らしたまへるに、何心もなく見上げたまへるまみらうたげにて、つらつき赤めるも、親の御目にはうつくしくのみ見ゆ。「うたた寝は諫めきこゆるものを、などか、いとものはかなきさまにては大殿籠りける。人々も近くさぶらはで、あやしや。女は、身を常に心づかひして守りたらむなんよかるべき。」  
(常夏・③・二三八)

中の君、昼寝の夢に故父宮の姿を見る。

弱き御心地は、いとど世に立ちとまるべくもおぼえず。恥づかしげなる人々にはあらねど、思ふらむところの苦しければ、聞かぬやうにて寝たまへるを、姫宮、もの思ふ時のわざと聞きし、うたた寝の御さまのいとらうたげにて、腕を枕にて寝たまへるに、御髪のみたまりたるほどなど、ありがたくうつくしげなるを見やりつつ、親の諫めし言の葉も、かへすがへす思ひ出でられたまひて悲しければ、罪深かなる底にはよも沈みたまはじ、いづくにもいづくにも、おはすらむ方に迎へたまひてよ、かくいみじくもの思ふ身どもをうち棄てたまひて、夢にだに見えたまはぬよ、と思ひつづけたまふ。夕暮の空のけしきいとすごくし

ぐれて、木の下吹き払ふ風の音などに、たとへん方なく、来し方行く先思ひつづけられて、添ひ臥したまへるさまあてに限りなく見えたまふ。白き御衣に、髪は梳ることもしたまはでほど経ぬれど、迷う筋なくうちやられて、日ごろにすこし青みたまへるしも、なまめかしさまさりて、ながめ出だしたまへるまみ額つきのほども、見知らん人に見せまほし。

昼寝の君、風のいと荒きにおどろかされて起き上がりたまへり。山吹、薄色などはなやかなる色あひに、御顔はことさらに染めにははしたらむやうに、いとをかしくはなばなとして、いささかも思ふべきさまもしたまへらず。「故宮の夢に見えたまへる、いともの思したる気色にて、このわたりにこそほのめきたまひつれ」と語りたまへば、いとどしく悲しさをひて、「亡せたまひて後、いかで夢にも見たてまつらむと思ふを、さらにこそ見たてまつらね」とて、二ところながらいみじく泣きたまふ。

(総角・⑤・三二〇)

原岡氏は、雲居雁の昼寝場面には、「うたた寝」「昼寝」「らうたげ」「腕を枕にして」「うつくし」といった表現から、「御髪」の美しさ、寝起きの顔のあでやかな様子への言及など、中の君の昼寝場面と重なる点が多いこと、また、「たちねの親のいさめしうたた寝は物思ふ時のわざにぞありける」(拾遺・恋四・読人しらず)を引き歌としながら、「うたた寝は諫めきこゆるものを」と父親にたしなめられた雲居雁は、夕霧との仲を引き裂かれています。物思いを抱え、「もの思ふ時のわざと聞きし」と語られる中の君は、夜離れがちな匂宮への不安を抱えていること等、両者の重なりを指摘している。しかしながら、決定的に異なるのは、昼寝姿を見ている人物で

ある。中の君の昼寝を見つめる主体が姉という同性であることから、「はなやかな愛らしさを見取り続け、昼寝姿の魅惑を伝えるようでありながら、八の宮への思いに場面が収束」しているのである。

昼寝の夢に亡き父親が現れるという点では、末摘花の昼寝場面と重なる。

いとどながめまざるころにて、つくづくとおはしけるに、昼寝の夢に故宮の見えたまひければ、覚めていとなごり悲しく思ひて、漏り濡れたる廂の端つ方おし拭はせて、ここかしこの御座ひきつくろはせなどしつづつ、例ならずせびきたまひて、

亡き人を恋ふる袂のひまなきに

荒れたる軒のしづくさへ添ふ

(蓬生・②・三四五)

も苦しきほどになむありける。  
末摘花の昼寝を捉える人物がないという差異があるものの、末摘花も中の君も、孤独な物思いの状態で見た夢の中で亡くなった父親に会うという体験をしている。夢の中で亡き父親に会うという体験は、「非日常的なものに出会う特権的な瞬間」であったのだろう。このことは、須磨で源氏が見た故桐壺院の夢を始め、死者が現れる夢すべてについてもいえることである。

「特権的な瞬間」において、現実では会うことができない人と会ったり、相手から助言を受けたりする。そのことは、夢を見た人物に対して精神的にも何らかの影響を与えたはずである。末摘花は雨漏りのする屋敷を整え、独詠歌まで詠んでいる。目覚めた中の君の顔は「ことさらに染めにははしたらむやうに」美しくあでやかであり、まるで物思いなどしていないような表情だと描写されている。「特権的な瞬間」が与えるパワーのようなものを読み取ることができよ

う。

このように、他の昼寝の用例との重なりを見せながらも、中の君の昼寝は独自の展開を見せていく。中の君が昼寝で夢を見たことによつて、大君と中の君姉妹の間には一つの差が生まれている。その差とは、父親の夢を見たか見ないかという点である。

夢から覚め、(寝覚め) 場面で少々興奮気味な様子で夢に現れた八の宮のことを話す中の君に対して大君が「亡せたまひて後、いかに夢にも見たてまつらむと思ふを、さらにこそ見たてまつらね」と述べていることや、「かくいみじくもの思ふ身どもをうち棄てたまひて、夢にだに見えたまはぬよ」(総角・⑤・三一) と思つていることからも分かるように、夢で八の宮に会いたいと切実に願つているにも関わらず、大君は八の宮の夢を見る事ができない。その悲しみは涙となつて流れ落ち、傍らにいる中の君と「二ところながらいみじく」泣く。ここで注目したいのが「二ところながら」という言葉である。

これまで大君・中の君姉妹は行動を共にすることが多く語られ、その姿は「もろとも」「同じ心に」という形で表現されてきた。ところが、この場面では二人は「もろとも」とは表現されていない。「もろとも」「同じ心」が表すような「一緒に」「揃つて」という二人が全く同じという意味と比べると、「二ところ」には、「二ヶ所」「二人が別々に」「それぞれが」という意味が強く表れていると思われる。

実際、大君と中の君が涙している理由は、大君が八の宮の夢を見れないこと、中の君は八の宮の夢の余韻であると思われ、涙の原因が異なったものとなっているのである。夢見の有無は、二人の間に

目に見えない境目を作つたのである。それではなぜ大君は夢を見る事ができなかったのだろうか。

大君の夢に八の宮が現れなかった原因としては、二人の娘に対する八の宮の考え方の違いが挙げられると思われ。大君と中の君はそれぞれが八の宮夫妻にとつてかけがえのない存在であつた。大君は、なかなか子どもが生まれなかつた夫妻がやっと授かつた子であり、中の君は北の方が命と引き換えに産んだ子である。

しかし、北の方が臨終の際に残した、「ただ、この子をは形見に見たまひて、あはれと思せ」(橋姫・⑤・一一九) という言葉が二人の運命を変えたと思われる。「この子」とは生まれたばかりの中の君を示しており、八の宮に中の君を自分の形見と思つて大事に可愛がつてほしいと託して死去する。この時、八の宮の心の中に、中の君は大切に庇護されるべき存在という位置付けが生まれたのかもしれない。北の方の遺言の力によつて、中の君は比類ない娘として姉を凌駕したのである。

一方、大君は、長女として八の宮の遺言を一身に引き受ける立場であり、八の宮の死後は、父親に代わつて中の君を見守り続けている。中の君が昼寝をしている場面が大君の視点で語られていることから、中の君の庇護者としての大君の姿を垣間見ることができよう。

母の死によつてもたらされた姉妹の立場の違いが、夢見にまで影響を及ぼしたといつてよいのではないか。中の君は、夢の中では八の宮に、現実の世界では大君に見守られるという形で、二重に庇護されて昼寝をしているのである。大君と中の君は、見守る姉と見守られる妹という構図が確立されてしまつた姉妹であるといえよう。

見守る側にいた大君が、見守られる側に回るのは、薫によつて死顔を捉えられる時であつた。

中納言の君は、さりととも、いとかかることもあらじ、夢かと思つて、御殿油を近うかかげて見たてまつりたまふに、隠したまふ顔も、ただ寝たまへるやうにて、変りたまへるところもなく、うつくしげにてうち臥したまへるを、かくながら、虫の殻のやうにても見るわざならましかばと思ひまどはる。

(総角・⑤・三一九)

大君は臨終の間際まで中の君の身を案じ、最期の力を振り絞つて中の君の将来を薫に頼み、死んでしまふ。大君の死顔は、薫によつて「ただ寝たまへるやうにて」(ただ眠つていらつしやるよう)と捉えられる。これまで見守る側に徹していた大君は、薫に見守られて永遠の(眠り)につくのである。大君の臨終は、大君が命を終えると共に、見守る役目も終えたことを示しているのであろう。

### 三 再現される「もろとも」空間

大君の死後、匂宮に京へ引き取られた中の君は、宇治の山里をこゝとあるごとに恋しがり、薫に宇治行きを頼んだりしていたが、叶わずにいた。匂宮の子どもを出産し、それなりに穏やかな生活を送っていたところに、異母妹である浮舟の庇護を浮舟の母である中将の君から依頼される。

東屋巻に描かれる中の君と浮舟の対面場面には、浮舟を優しく包み込む、姉としての大人びた中の君の姿を読み取ることができ、ある場面では大君と中の君の関係を想起させるような姿までも描かれ

ている。

中の君が浮舟を招いて対面したのは、匂宮に言い寄られた浮舟をいたわつてのことであつた。実際に浮舟の動揺は大きい。

恐ろしき夢のさめたる心地して、汗におし漬して臥したまへり。

(東屋・⑥・六六)

君は、ただ今はともかくも思ひめぐらされず、ただいまじくはしたなく、見知らぬ目を見つるに添へても、いかに思すらんと思ふにわびしければ、うつぶし臥して泣きたまふ。

(東屋・⑥・六七)

匂宮が去つた後、浮舟は、突然の出来事に恐ろしい夢から覚めたような心地がして、汗にぐつしよりと濡れてうつぶしてしまつている。乳母に慰められ、励まされても、浮舟の念頭には匂宮に迫られたという一件以外のことはなく、ひたすらに姉である中の君の心情を推し量つている。「見つるに添へても」という部分からは、自身自身の受難を辛く思う気持ちに加えて、さらに別の思いを浮舟が働かせている様子を読み取ることができる。

浮舟は、左近少将との縁談が破れても、そのために中の君に近づき得たのを喜んでいたのであつた。ところが、その姉の夫に言い寄られた不都合さを思い、憧れのこの邸にはもういられないと思ひ嘆いているのである。

中の君の不快感を想像している浮舟の心に反して、浮舟が匂宮に言い寄られたことを知つた中の君は、浮舟を「いとほしく、うたて思ふらん」と思ひやつている。そして、この一件を知らないふりを装つて、浮舟を部屋に招くのである。

乳母に促されてやつとのことで中の君のもとへとやつてきた浮舟

は、「知らず顔」の中の君のいたわりと優しさに包まれることとなる。

「例ならずつつまじき所など、な思ひなしたなひそ。故姫君のおはせずなりにし後、忘るる世なくいみじく、身も恨めしく、たぐひなき心地して過ぐすに、いとよく思ひよそへられたまふ御さまを見れば、慰む心地してあはれになむ。思ふ人もなき身に、昔の御心さしのやうに思ほさば、いとうれしくなん

(東屋・⑥・七二)

大君にそっくりな浮舟を見て、中の君の中には亡き大君を恋い慕う気持ち溢れ出していく。父親も母親も姉すらも亡くした中の君にとつての唯一の肉親である浮舟を受け入れ、心から温かく接していく様子が描かれている。しかし、中の君の視線は浮舟に大君の面影を重ねずにはいられず、二人で絵を見ている時でさえ、絵には目もくれずに、視線は浮舟の顔に向けられている。

いとあはれなる人の容貌かな、いかでかうしもありけるにかあらん、故宮にいとよく似たてまつりたるなめりかし、故姫君は宮の御方さまに、我は母上に似たてまつりたるところは、古人ども言ふなりしか、げに似たる人はいみじきものなりけりと思し比ぶる

(東屋・⑥・七三)

浮舟の顔を見つめているうちに中の君の心に思い浮かんでくるのは、今は亡き父と姉の顔であり、実際は顔は覚えていないけれど、自分に似ているという母であった。亡き肉親の顔と目の前にいる浮舟の顔がだぶり、中の君はどうとう涙を流す。涙に霞んだ中の君のまなざしは、自ずと浮舟の内面へと向けられ、「せめてもう少し重々しい風情を身に付けさせたなら、大将がお相手になさってもけつして見苦しいことはあるまいに」と姉らしい思いから気を回していく。

こうして語られ始めた新しい姉妹は、その夜、共に眠る。

物語などしたまひて、暁方になりてぞ寝たまふ。かたはらに臥せたまひて、故宮の御事ども、年ごろおはせし御ありさまなど、まほならねど語りたまふ。

(東屋・⑥・七四)

世間話などをして明け方になってから二人が眠る場面には、中の君が浮舟を傍らに寝かせる様子が語られている。二人で並んで横になり、語り合う姿は、かつての大君と中の君の姿を想起せずにはいられない。大君との関係から築き上げられた「もろとも」空間が、浮舟という異母妹を得たことにより中の君の中に再び生まれた瞬間であるといえよう。

### おわりに

浮舟との新たな姉妹関係は、この後浮舟が中將の君に引き取られたことにより、続かなくなる。東屋巻での対面は、最初で最後の姉妹の交流の場なのであった。そして、母親は異なるとはいえ、血の繋がった妹である浮舟を目の前にした中の君の姉としての対応を読み取っていくと、その背景には、大君と共に支え合い寄り添って生活してきた頃の「もろとも」空間の意識が根強く存在しているように感じられる。

このように、日常生活の中で、とりわけ私的な色の濃い〈眠り〉周辺には、人物の本音や思惑、心の動きが描き出されているように思われる。〈眠り〉を軸にして読み進めていくことで、父親の死後、寄り添って生活してきた大君・中の君姉妹の連帯感、その中に介入していく外部からの刺激によって変化していく姉妹関係の微妙な変

化を読み取ることができよう。

※本文は、新編日本古典文学全集「源氏物語」①～⑥（小学館）に拠った。

註

(1) 葵の上を亡くした際の源氏は、「殿におはし着きて、つゆまどろまれたまはず、年ごろの御ありさまを思し出でつつ、などて、つひにはおのづから見なほしたまひてむとのどかに思ひて、なほざりのすざびにつけても、つらしとおほえられたたまつりけむ、世を経て疎く恥づかしきものに思ひて過ぎはてたまひぬる、など悔しきこと多く思しつづけられるれど、かひなし」(葵②・四八)、「夜は御帳の内にひとり臥したまふに、宿直の人々は近うめぐりてさぶらへど、かたはらさびしくて、「時しもあれ」と寢覚めがちなるに、声すぐれたるかぎり選りさぶらはせたまふ念仏の曉方など忍びがたし」(葵②・五一)、「深き秋のあはれまさりゆく風の音身にしみけるかな、とならぬ御独り寝に、明かしかねたまへる朝ぼらけの霧りわたれるに、菊のけしきはめる枝に、濃き青鈍の紙なる文つけてさし置きて往にけり」(葵②・五一)と語られている。

(2) 薫については、〈眠り〉に関して匂宮の〈眠り〉と対極的な立場にあると思われる。薫の〈眠り〉に関する用例を見ていくと、〈寢覚め〉がちな姿が一貫して描かれると感ぜられる。中でも「まどろまず」という自ら〈眠り〉を拒否するかのような「寝ない態度」が特徴的である。

これに対して匂宮の〈眠り〉に関する用例は、中の君を二条院へ迎えた後である宿木巻以降から、満ち足りた〈眠り〉が描かれるようになっていく。

(3) 男女間の問題による物思いによって寝られない人物としては源氏が挙げられ、特に空蟬との関係を巡っての〈寢覚め〉がちな姿が

多く描かれている。そもそも、空蟬垣間見のきつかけとなったのも、「君は、どけても寝られたまはず、いたづら臥しと思さるるに御目さめて」(帚木①・九七)というように、源氏が寝られなかつたことが発端であつた。空蟬のことを思つて寝られない源氏は、「殿に帰りたまひても、とみにもまどろまれたまはず、またあひ見るべき方なきを、まして、かの人の思ふらむ心の中いかならむと心苦しう思ひやりたまふ」(帚木①・一〇五)、「寝られたまはぬままに、「我はかく人に憎まれても習はぬを、今宵なむ初めてうしと世を思ひ知りぬれば、恥づかしくてながらふまじくこそ思ひなりぬれ」などのたまへば、涙をさへこぼして臥したり」(空蟬①・一一七)、「ありつる小桂を、さすがに御衣の下にひき入れて、大殿籠れり。小君を御前に臥せて、よろづに恨み、かつは語らひたまふ。「あこはらうたけれど、つらきゆかりにこそえ思ひはつまじけれ」と、まめやかにのたまふを、いとわびしと思ひたり。しばしうち休みたまへど、寝られたまはず」(空蟬①・一二九)等と語られている。

(4) 三田村雅子「大君物語―姉妹の物語として―」(『源氏物語研究集成』第二巻・一九九九年・風間書房)

(5) 本稿に挙げた以外の「昼寝」の用例は、「くまのの物語の絵にてあるを、「いとよく描きたる絵かな」とて御覧す。小さき女君の、何心もなくて昼寝したまへる所を、昔のありさま思し出でて、女君は見たまふ」(蜩③・二二四)、「ただ今昼寝してはべる夢に、人の思むといふことなん見えたまひつれば、おどろきながら奉る」(浮舟⑥・一九四)である。

(6) 原岡文子「雲居雁の身体をめぐって―「常夏」を始発に―」(『源氏研究』第八号・二〇〇三年・翰林書房)

(7) 西郷信綱「古代人と夢」(平凡社ライブラリー1・一九九二年)

(8) 三田村雅子(4) 論文に同じ)は、「二ところながらいみじく泣きたまふ」について、「男性との関係をめぐってすれ違い、離れ離れになつてしまつた二人の姉妹は、この父の夢を媒介にもう一

度心を結び直す」とし、夢の前後に「身ども」という複数形で姉妹を捉える表現が、再び表れだすことを指摘している。本稿で論じた、「二」ところながら」を「大君・中の君が別々に」という意味として捉える考え方は、二〇〇四年度フェリス女学院大学大学院における三木紀人氏の講義で示唆を受けたところが大きい。

(本学博士前期課程修了)